

ライヴ録音の醍醐味

今村 央子

私は20代の後半をパリに暮らした。パリという街は、ヨーロッパ文化の交差点のような場所である。さまざまな国から超一流の音楽家が集まってきて、毎晩のようにコンサートを行っている。当時、とにかくがむしゃらに音楽に打ち込んでいた私にとって、素晴らしいコンサートを聴くことは、非常にエキサイティングな出会いであり、一流の演奏家の「音楽の真髄」に触れることで、次第に自らが目指す方向をも見つけていったような気がする。今となっては一つ一つのコンサート、そこで演奏された曲に、その時の思い出が重なって、とてもなつかしい。

さて、今日は私が聴いたコンサートの中でも、もつとも寒いコンサートの体験を話そうと思う。

ある冬の日、パリ中心部の教会で、バッハの《クリスマス・オラトリオ》を、トン・コープマン指揮、アムステルダム・バロック・オーケストラの演奏で聴きに行くはずだったが、めずらしく雪が降り、その上パリ名物のストで電車が止まってしまった。結局、徒歩で約2時間かけて教会に辿り着いたのだが、その時にはまだ十分に余力が残っていると自信たっぷりの私であった。

しかし、コンサートが始まってみると、石造りのかなり大きな教会の内部は、暖房もなく恐ろしく寒い。なんと、演奏者も皆色とりどりの防寒コートを着たままである。そんな中でも、コープマンはいつもと変わらず楽しそうにチェンバロを弾きながら指揮をしていて、それがなんだか妙に可笑しい。私も最初は、「この寒さでピッチは大丈夫かな」とか「指がかじかまないかしら」などと演奏者の心配まです

る余裕があった。しかし、次第に石の床から迫ってくるんしんとした寒さに、雪道を歩いた疲れが加わって、だんだん眠気を催してきた。そして、大好きなはずの《クリスマス・オラトリオ》が、遠のく意識と必死で戦うだけの苦行と化してきた。こういう時は1分が永遠に感じられる程、時の経つのがのろい。何とか前半終了まで持ちこたえたものの、コンサートを途中で断念、とにかく暖かい物を飲みたい一心で、会場から出ることにした。席を立つ私に、フランス人の婦人が平然とひとこと。「あら、まだコンサートは半分よ。これは休憩ですよ。」

こんな体験もあるからか、CDを聴く時もライヴ録音が好きだ。ライヴ録音の醍醐味はやはり、自分がそのコンサート会場にいるかのような臨場感であろう。あの独特の熱気には、スタジオ録音にはない高揚感とエネルギーがみなぎっていて、こちらもいや応なく想像力を掻き立てられる。時々、熱中すぎて曲が崩壊しそうになりながらも何とか持ちこたえる演奏や、小さなハプニングが起こっている演奏もあり、それもまた一興である。

今は亡きカルロス・クライバーがバイエルン国立管弦楽団を指揮しているベートーヴェン《交響曲第7番》のCDは、数あるライヴ録音の中でも、何度聴いても鳥肌が立つ一枚である。その場に立ち会えなかった人にも、一度きりのそのコンサートがいかに熱狂的かつ感動的だったかが存分に伝わってくる、とびきりの一枚だ。